

HLL 型オノマトペの形態・音韻構造*

那 須 昭 夫

1. はじめに

日本語のオノマトペには、重音節の形態に二つの軽音節からなる形態が結合した構造を持つ次のような定型的な語形がある。

(1) ポンポコ (ポン), キンキラ (キン), プップカ (プー), タッタカ (ター)

本稿ではこれを音節構造のあり方から「HLL 型オノマトペ*1」と呼び、その形態・音韻構造に見られる特徴について考察する。HLL 型オノマトペはこれまでのオノマトペ研究においてほとんど分析の俎上に置かれる機会のなかった形態であり、各種オノマトペ辞典を見ても項目として掲載されている例はそれほど多くない (天沼1974, 山口2003)。しかし、日常的なオノマトペ表現においてこの形態が用いられる機会は想像以上に多く*2, 新造形の生産力も大いに認められる*3。

本稿のねらいは、HLL 型オノマトペの音韻構造および語形成に働く文法性を明らかにすることにある。ただし、先述のとおりこの語形の実態はこれまで十分に把握されてきたわけではないため、本稿の範囲では HLL 型オノマトペの中核的な特徴を反映する事象として、CV モーラの対応・接頭辞の音韻構造・特殊モーラの選択制限の三点を中心に取り上げて考察する。まず第2節で HLL 型オノマトペの語構造について論じ、第3節においてこの語形の主要な特徴である CV モーラの対応について言語事実の検討を行う。第4節では接頭辞が現れるパターンについて検討しながら、HLL 型オノマトペの語形成の式型として接頭辞型の派生構造を提案し、この形態に生じる CV モーラの対応が部分複製の過程として分析できることを示す。第5節からは HLL 型オノマトペに含まれる特殊モーラの振る舞いについて考察する。特殊モーラの実現が日本語に一般的に適用される音韻制約 (有声重子音忌避制約) によって制御されている

ことを第6節で示し、これに関連する現象を第7節で検討する。

2. 形態構造

本稿で「HLL型」と呼ぶのは、重音節からなる形態素(m1)とそれに続く二つの軽音節からなる形態素(m2)を含んだ次のような一群の形態である。

[m1+m2] からなるこの構造を「基本形」と呼ぶ。

(2) 基本形 ([m1+m2])

ポン+ポコ, キン+キラ, ドン+ドコ, タツ+タカ, プッ+プカ

語によってはこれにもうひとつ別の重音節からなる形態素(m3)が後続し、(3)の形態が作られることもある。こちらを「拡張形」と呼ぶ。ただしm3は随意的な要素であり、必ずしも全てのHLL型オノマトペに現れるわけではない。

(3) 拡張形 ([m1+m2] +m3)

[ポンポコ] ポン, [キンキラ] キン, [ドンドコ] ドン, [プップカ] プー

m1・m2およびm3は直列的な単純結合構造をなしているのではなく、(3)に示す左枝分かれの階層構造をなしていると考えられる。基本形[m1+m2]が語形成の第一循環に相当し、拡張形はその外側にm3が結合する第二循環に相当する。

(2)を「基本形」とし、(3)をその「拡張形」と解釈するのは、HLL型を含むオノマトペ表現の中に[m1+m2]構造からなる形式をひとまとまりの要素とする(4)のような語形成が見られるからである。

(4) a. ズンドコ節 (曲名), トットコハム太郎 (アニメ), 平成狸合戦ポンポコ (映画)

b. ドンドコ+ドンドコ, ズンチャカ+ズンチャカ, パッパカ+パッパカ

これらでは[m1+m2]のまとまりが語形成の単位として働いている。(4a)ではこの単位が複合の一要素になっており、(4b)では[m1+m2]が反復の基体として働いている。

3. CV モーラの対応

HLL 型オノマトベの音韻構造に見られる最も顕著な特徴は、m1とm2に類似した音韻構造が現れることである。(5)に例示するように、多くの語形においてm1とm2には同一のCVモーラが現れる。

(5) 同一 CV モーラ

<u>po</u> N- <u>poko</u> (ポンポコ)	<u>ta</u> Q- <u>taka</u> (タッタカ)
<u>de</u> N- <u>deko</u> (デンドコ)	<u>to</u> Q- <u>toko</u> (トットコ)
<u>ka</u> N- <u>kara</u> (カンカラ)	<u>pa</u> Q- <u>paka</u> (パッパカ)
<u>ki</u> N- <u>kira</u> (キンキラ)	<u>pa</u> Q- <u>para</u> (パッパラ)
<u>ti</u> N- <u>tiro</u> (チンチロ)	<u>pu</u> Q- <u>puka</u> (プップカ)
<u>be</u> N- <u>beko</u> (ベンベコ)	<u>pu</u> Q- <u>puku</u> (プップク)

同一のモーラの対応が起こるのは、常にそれぞれの形態素の左端の位置においてである。m2には軽音節が二つ含まれているが、このうち左側の軽音節がm1のCVモーラと同一の形式を持つ(poN-po.ko.)。これに対して、m2の二番目の軽音節のCVモーラが対応する(6a)のようなパターンや、別個の軽音節に属する子音と母音とを非連続的に組み合わせて対応させる(6b)のようなパターンは起こらない。

- (6) a. *raN-kira (*ランキラ) b. *kaN-kira (*カンキラ)
 *koN-deko (*コンデコ) *doN-deko (*ドンデコ)
 *kaQ-puka (*カッパカ) *paQ-puka (*パッパカ)

Hamano (1986, 1998)によれば、オノマトベの形態素の先頭に位置するCVモーラには対象物の触感・形状・大きさおよび動きのタイプを表象する性質があるとされるが、この説明に従えば、HLL型オノマトベでのCVモーラの対応(5)は、類似の象徴性を持つ音韻構造を一語の中で共起させた結果起こる現象だと解釈される。

m1・m2での同一モーラの対応は、HLL型オノマトベを特徴づける特有の性質である。オノマトベの中には見かけ上HLL構造を持つ語形がほかにもあるが、本稿で考察対象とする語形と区別する上で、上述の特徴は重要な手がか

りとなる。たとえば次に挙げるオノマトベは、重音節(H)と軽音節(LL)からなる点ではHLL型と同じ音節構造を持つが、同一のCVモーラの対応が見られない点で、真正のHLL型とはみなせない。

- (7) a. バツタリ, ポックリ, ザンプリ, グンニヤリ
 b. エッチラ, オッチラ, ピーチク, パーチク, ピーヒャラ

(7a) は接辞形オノマトベに強調の特殊モーラが加わった形であり、その結果としてHLL型の音節構造が備わっているにすぎない。また(7b)はいわゆる並列語を構成する形態であり、やはりCVモーラの対応を含まないため真正のHLL型オノマトベとはみなせない。

4. 反復接辞

HLL型オノマトベの中には、m1に特別な形態素が現れるがゆえにm1とm2の間に音韻的類似性が生じない次のようなパターンも見受けられる。

- (8) doN-tyaka (ドンチャカ)
zuN-doko (ズンドコ)
suQ-taka (スツタカ)
tuQ-taka (ツツタカ)

これらの形に関して興味深いのは、m1に位置する形態素「ドン、ズン、スツ、ツツ」に極めて限られた音韻構造しか起こらないことである。まず、その子音は舌頂音/t, d, s, z/に限られており、かつ、その母音も後舌母音/u, o/に限られている。那須(2004)は、オノマトベにおいて接頭辞として働く形態素にこれと同様の組み合わせを持つパターンが多いことを指摘している。この指摘に鑑みると、(8)のm1に現れる「ドン、ズン、スツ、ツツ」も一般のオノマトベ語幹というよりはむしろ接頭辞的な形態素である可能性が高い。

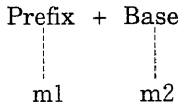
接頭辞をm1に伴う(8)の語形は、前節で述べたCVモーラの対応とは無縁の形態である。しかしながら、これらの形態がCVモーラの対応を持つ通常の形態と交替可能な関係にある点に注目したい。

(9) m1の交替

(a)	(b)	
<u>doN</u> -tyaka	<u>tyaN</u> -tyaka	(ドンチャカ ~ チャンチャカ)
<u>zuN</u> -doko	<u>doN</u> -doko	(ズンドコ ~ ドンドコ)
<u>suQ</u> -taka	<u>taQ</u> -taka	(スツタカ ~ タツタカ)
<u>tuQ</u> -taka	<u>taQ</u> -taka	(ツツタカ ~ タツタカ)

(9a) と (9b) は、共通の語幹として m2 を持ちながらも、m1 の位置で形態素の入れ替えが生じている組み合わせである。すなわち、m2 が定項であるのに対し m1 は変項であることから、この語形成では m2 がその基体 (base) として働き、m1 はそれに対して結合する派生要素 (接頭辞) として機能していると考えることができる。この見方に基づくと、HLL 型オノマトペの語形成の式型は次のように表せる。

(10) 語形成の式型



この分析はまず、接頭辞「ドン、ズン、スツ、ツツ」が m1 に現れる (9a) に関しては素直に首肯できよう。対して (9b) に関しては、m1 の位置に明らかに接頭辞とみなせる特定の形態が現れるわけではないので、(10) の分析があてはまるかどうか一見疑問に思われるところである。

しかしながら、ここで想起したいのは、接辞の種類の中には特定の形態を持たずに基体の構造を複写することによって得られる再帰的なタイプが存在することである。このような再帰的な接辞は反復接辞 (reduplicative affix) と呼ばれ、通言語的にも多くの事例が知られている (Broselow and McCarthy 1983-84, McCarthy and Prince 1986, 1996)。反復接辞を伴う語形成の一例としてイロカノ語 (Ilokano) の事例を引く (例は McCarthy and Prince (1996) による)。

(11) イロカノ語

/basa/ ag-basbasa 'be reading'

/adal/	<i>ag-<u>ad</u>adal</i>	'be studying'
/tekder/	<i>ag-<u>tak</u>takder</i>	'be standing'
/trabaho/	<i>ag-<u>trab</u>trabaho</i>	'be working'

この語形成では重音節が複写の鋳型として機能しており、基体の左端から重音節を一つ複写し、それを基体の左側に接頭辞として結合するという再帰的なプロセスが生じている。こうした複写の関わる接辞形成では、複写の鋳型となる韻律範疇さえ特定できれば接辞の具体的な形態構造を逐一指定しておく必要はない (McCarthy and Prince 1986, 1996)。接辞の構造が音韻的規則によって予測できるからである。

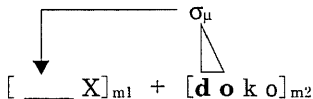
HLL 型オノマトペでも、以下にあらためて示すように基体 m2の一部に含まれる構造と同じ構造が m1に再現する性質がある。このことから、HLL 型に生じる CV モーラの対応現象も複写作用を経由した反復の一例としてみる事ができる。

(12) HLL 型 (= 5)

po N- poko (ボンポコ)	ta Q- taka (タツタカ)
de N- deko (デンデコ)	to Q- toko (トットコ)
ka N- kara (カンカラ)	pa Q- paka (パツパカ)
ki N- kira (キンキラ)	pa Q- para (パツパラ)
ti N- tiro (チンチロ)	pu Q- puka (プップカ)
be N- beko (ベンベコ)	pu Q- puku (プップク)

すなわち m2を基体とし、そこから m1の構造が派生されると考えることにより、CV モーラの対応がおこるしくみを次のように捉えることができる。「ドンドコ」を例に複写のプロセスを図示したのが (13) である。(X は特殊モーラ)

(13) 「ドンドコ」



CV モーラの単位が複写されることから、反復接辞の具体的な構造を決めているのは軽音節 (σ_μ) であることが分かる*⁴。このとき複写は m2 の左端の軽音節を対象に生じ、複写された構造は基体の左端に再帰的に結合する。つまり、HLL 型オノマトベの語形成では複写の始発点と帰着点がいずれも基体の左端の位置に一定しているわけだが (edge-in association)、こうした起点と着点の一致は、部分反復を伴う諸言語においてしばしば見られる一般的な文法性であることが知られている (Yip 1988, McCarthy and Prince 1996) *⁵。

5. 特殊モーラ

ここからは三節にわたり、HLL 型オノマトベに現れる特殊モーラの性質について検討する。(13) の分析では特殊モーラを X として示しておいたが、その内実はどのようなしくみで決まるのだろうか。この節ではまず、HLL 型オノマトベに現れる特殊モーラの分布上の特徴を見ておく。

[m1+m2] 構造の末尾に m3 を含む拡張形では、m1 と m3 の特殊モーラの間に次の対応が観察される。m1 に撥音を伴う語形では m3 においても撥音が現れ (=14a)、m1 に促音を伴う語形では m3 に長母音が現れる (=14b) *⁶。

(14) 特殊モーラの対応

- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| a. po <u>N</u> -poko-po <u>N</u> | (ポ <u>ン</u> ポコポ <u>ン</u>) |
| ki <u>N</u> -kira-ki <u>N</u> | (キ <u>ン</u> キラキ <u>ン</u>) |
| zu <u>N</u> -doko-do <u>N</u> | (ズ <u>ン</u> ドコド <u>ン</u>) |
| ti <u>N</u> -tiro-ri <u>N</u> | (チ <u>ン</u> チロリ <u>ン</u>) |
| b. pa <u>Q</u> -para-paa | (パ <u>ッ</u> パラパー) |
| pu <u>Q</u> -puka-puu | (プ <u>ッ</u> プカプー) |
| su <u>Q</u> -taka-taa | (ス <u>ッ</u> タカター) |
| tu <u>Q</u> -taka-taa | (ツ <u>ッ</u> タカター) |

つまり、撥音と促音がひとつの語形の中で同居することはない。m1 に撥音が含まれるならば m3 にも常に撥音が現れるのである*⁷。

この対応は、撥音と促音の音象徴機能の違いと関わりのある現象だと考えられる。オノマトベの特殊モーラはそれぞれ特有の音象徴機能を備えており (Hamano 1986, 1998)、撥音には撥音独特の、促音には促音に独特の象徴機能が

ある。こうした機能的な側面から見れば、ひとつの語の中で同一の音象徴機能を備えた特殊モーラが一貫して現れるのはごく自然なことだと言える。特殊モーラの「調和」が果たされることにより、ひとつの語において一貫した象徴効果が発揮できるからである。

これに関連する現象として、HLL型拡張形に現れる接尾辞の振る舞いも見ておきたい。通常、拡張形では上に見たようにm1と対応する音韻構造がm3に現れるが、中にはm3の位置に形態素「リン」を伴う語形を作るものがある。

(15) 「リン」形

poN-poko- <u>riN</u>	(ポ ン ポ コ リ ン)
tiN-tiro- <u>riN</u>	(チ ン チ ロ リ ン)
kiN-kira- <u>riN</u>	(キ ン キ ラ リ ン)
tuN-turu- <u>riN</u>	(ツ ン ツ ル リ ン)
koN-koro- <u>riN</u>	(コ ン コ ロ リ ン)

「リン」は、その現れる位置から接尾辞と解釈される*。語によっては「ボンポコボン～ボンポコリン」のように通常の拡張形とリン形が対応することもある。リン形をめぐって興味深いのは、m1に撥音を含むオノマトベに限定してm3に「リン」が共起することである。実際(15)のリン形は全てm1の特殊モーラとして撥音を含んでいる。反対に、m1に促音を含むオノマトベでm3に「リン」が共起する例は見当たらない(例：*タッタカ-リン)。先に(14)で、m1とm3に含まれる特殊モーラが対応する様子を見たが、「リン」の起こり方についてもこの一般性は成り立つようである。

6. 特殊モーラを選択と文法性

前節で見た特殊モーラの対応は、同一語内における音象徴機能の整合性という観点から一定の説明が可能な現象であった。各分節音が特有の音象徴性を担うことはオノマトベの代表的な特徴であり、これは特殊モーラに関しても例外ではない。従来重ねて指摘されているように、オノマトベに現れる撥音・促音にはそれぞれ特有の音象徴機能が備わっている(Waida 1984, 田守 1991, 田守・スコウラップ 1999, Hamano 1986, 1998)。HLL型オノマトベに関しても、m1での特殊モーラの現れ方は他の音韻構造とは独立に制御されている面

がある。この点を踏まえて (13) の分析では特殊モーラを X として示しておいたわけだが、実際、HLL 型に生じる m2-m1 間の音韻構造の複写は CV モーラだけに限られており、その直後に続く特殊モーラは複写には関与していない。このことは、特殊モーラだけを異にする次のようなミニマル・ペアの存在からも窺える。

(16) 撥音と促音

pa <u>N</u> -paka	pa <u>Q</u> -paka	(パンパカ：パツパカ)
to <u>N</u> -toko	to <u>Q</u> -toko	(トントコ：トットコ)
ta <u>N</u> -taka	ta <u>Q</u> -taka	(タンタカ：タツタカ)
po <u>N</u> -poko	po <u>Q</u> -poko	(ポンポコ：ポツポコ)
tya <u>N</u> -tyaka	tya <u>Q</u> -tyaka	(チャンチャカ：チャツチャカ)
tu <u>N</u> -taka	tu <u>Q</u> -taka	(ツンタカ：ツツタカ)

こうした事実を見る限りでは、m1でのモーラの選択は発話者がいかなる音象徴効果を目指すかによって、すなわち、もっぱら音象徴的な動機によって決定されているように思われる。

しかしながら、m1での撥音・促音の現れ方をめぐって、音象徴効果を動機とする上述の観点からは説明できない事実があることに注意したい。この点に関する初期的な観察として、HLL 型オノマトペの中に次のようなパターンが一切現れないことをまず指摘しておきたい。

(17) *ドッドコ, *バツパカ, *ポツポコ, *ジャツジャカ, *ダツダカ

この事実についてはどのように考えたらよいただろうか。(17) の語形が現れないのは決して偶発的・散発的な事象ではない。これらは体系的なギャップである。なぜなら撥音と促音の分布には以下に述べるような一定の非対称性が見られるからである。まず撥音 (18a) は、その前後に位置するモーラが清音であっても濁音であっても現れる。翻って促音は、(18b) に示すように清音が前後する環境でないと現れない。

(18) 撥音・促音の非対称性

a. 撥音

(i)	(ii)	
to <u>N</u> -toko	do <u>N</u> -doko	(トントコ, ドンドコ)
pa <u>N</u> -paka	ba <u>N</u> -baka	(パンパカ, バンバカ)
po <u>N</u> -poko	bo <u>N</u> -boko	(ポンポコ, ボンポコ)
tya <u>N</u> -tyaka	zya <u>N</u> -zyaka	(チャンチャカ, ジャンジャカ)
ki <u>N</u> -kira	gi <u>N</u> -gira	(キンキラ, ギンギラ)

b. 促音

(i)	(ii) (=17)	
to <u>Q</u> -toko	*do <u>Q</u> -doko	(トットコ, *ドッドコ)
pa <u>Q</u> -paka	*ba <u>Q</u> -baka	(パッパカ, *バッバカ)
po <u>Q</u> -poko	*bo <u>Q</u> -boko	(ポッポコ, *ボッポコ)
tya <u>Q</u> -tyaka	*zya <u>Q</u> -zyaka	(チャッチャカ, *ジャッジャカ)
ta <u>Q</u> -taka	*da <u>Q</u> -daka	(タッタカ, *ダッダカ)

(17)に挙げた例はこの非対称性の一環をなす事実である。一定の環境(18b-ii)で一律にギャップが生じることから、この非対称性が音象徴機能を動機とする減少ではないことは明らかである。

(18b-ii)の構造では、促音の直後に有声阻害音が続く点の特徴である。日本語の音配列には促音の直後に有声阻害音が位置しないというよく知られた制約が働くが(有声重子音忌避制約; 浜田 1949, 黒田 1967, McCawley 1968, Itô and Mester 1995), (18b-ii)が適格でないのは、まさにこの制約に抵触する構造を含んでいるからにほかならない。すなわち(18)の事実、撥音と促音の選択が音象徴的な動機のみによって制御されているわけではないことを強く示唆している。むしろ、オノマトペについて考察する上で音象徴機能の影響を全く切り離して考えることはできない。しかし、たとえオノマトペであれ、日本語に一般的に働く音韻制約からかけ離れた破格の構造が現れないことは認識しておくべき事実である*⁹。

7. 子音の清濁と特殊モーラ

特殊モーラの選択制限に関わる現象として、この節ではさらにもうひとつ別

の現象を見たい。

複写を経由しない特別な形態素が接頭辞として m1 に現れるパターン (8) をもう一度吟味してみると、接頭辞の頭子音の有声性と特殊モーラの現れ方との間に相関性があることに気づく。頭子音が無声音である接頭辞では、(19a) に示すように特殊モーラとして促音・撥音のいずれが現れてもよい。しかし、頭子音が有声音である接頭辞 (19b) では、撥音を持つパターンは現れても促音を持つパターンは現れない。

(19) 接頭辞

a. C = [-voi]

tuN-taka (ツンタカ)

suQ-taka (スツタカ), **tuQ-taka** (ツツタカ)

b. C = [+voi]

doN-tyaka (ドンチャカ), **zuN-tyaka** (ズンチャカ)

***doQ-tyaka** (*ドツチャカ), ***zuQ-tyaka** (*ズツチャカ)

有声音は撥音とは共起しても促音とは共起しないわけだが、興味深いことに、この分布は上の (18) で検討した撥音・促音の非対称性と一致した振る舞いを示している。(18) と (19) のいずれの分布においても、m1 における特殊モーラの現れ方については次の制限が成り立つのである。

(20) 共起制限

m1 (CVX) において：

撥音は無声／有声音と共起するが、促音は無声音としか共起しない。

まず撥音は、m2 の CV モーラを複写して m1 が得られる語形 (21a) でも、特別な接頭辞が m1 に現れる (21b) でも、m1 の頭子音の声の有無に関わりなく現れることができる。

(21) 撥音

a. **paN-paka** / **baN-baka** (バンパカ／バンバカ)

b. **tuN-taka** / **doN-tyaka** (ツンタカ／ドンチャカ)

これに対して促音は m1 の頭子音が無声音でないと現れない。m2 の CV モーラを複写して m1 が得られる (22a) および、特別な接頭辞が m1 に現れる (22b) のいずれにおいても、m1 の頭子音が有聲である語形 (*バツバカ, *ドツチャカ) は見られない。

(22) 促音

- a. **paQ**-pala / ***baQ**-baka (パツバカ / *バツバカ)
 b. **tuQ**-taka / ***doQ**-tyaka (ツツタカ / *ドツチャカ)

このうち (22a) については、既に論じたように有聲重子音忌避制約を反映した非対称性であることが明らかであるが、有聲重子音を生じない (22b) でもこれと同じ振る舞いが見られることは興味深い。

この非対称性について、有聲音と促音が互いに相性のよくない分節であることは指摘できるものの、それ以上に洗練された分析は現段階では得られていない。しかし、少なくとも (20) に述べた制限が HLL 型オノマトペの接頭辞(m1) の適格性に関わる文法性として働いている可能性は十分に考えられる。

8. まとめ

本稿では、従来のオノマトペ研究において分析の及んでいなかった HLL 型のオノマトペを取り上げ、その語形成と音韻構造に見られる特徴について考察してきた。本稿ではとりわけ語頭の形態素 m1 に現れる音韻構造に注目し、HLL 型を反復語形成の一種として位置づけた上で、m1 と m2 における同一 CV モーラの対応が起こるしくみを音韻構造の複写の過程として分析した。また、m1 に現れる特殊モーラに非対称な分布が観察されることを指摘し、特殊モーラを選択が一般的な制約(有聲重子音忌避制約)に従っていることを明らかにした。

オノマトペは音象徴のことばであるがゆえに、その音韻構造の特性を探るにあたり音象徴論的観点からの説明がなされやすい。しかしながら、たとえそうした特殊な事情を抱える語種であれ、言語的な制約と全く没交渉なわけではない。本稿ではこの点を、HLL 型オノマトペの語形成が通言語的な反復現象の一例とみなせることや、一般的な音韻制約の範囲内で特殊モーラを選択が生じていることを通じて示してきた。なお、(20) に指摘した共起制限については、これが音象徴上の動機づけを持つ現象であるのか、あるいは何らかの形態構造

制約として一般化できる性質のものなのか、現段階では定かではない。本稿の範囲では非対称性の事実を示すに留まったが、今後引き続き検討の余地がある。

付記

*本稿は、科学研究費補助金の助成を受けた研究課題「オノマトベの韻律計算機構の獲得と変異に関する研究」(若手研究B, 16720089, 研究代表者: 那須昭夫)による研究成果の一部をまとめたものである。

注

1. Hは重音節, Lは軽音節を指す。
2. 一般に知られているところでは、『踊るボンボコリン』(歌謡)・『トットコハム太郎』(テレビアニメ)・『ズンドコ節』(歌謡)・『青春デンデケデケデケ』(映画)・『平成狸合戦ボンボコ』(映画)などの作品のタイトルにHLL型のオノマトベが使用されている。
3. 新造語の多くは臨時的・泡沫的な性格を持つので、辞典に掲載された語形のような確定的な資料としては示しにくい。たとえば「チンチラポッポ」(島木ジョージ)・「チッチキチー」(大木こだま)といった喜劇や漫才の掛け合いに現れる例など、語彙としてどの程度定着するか定かでない形も多い。しかし、たとえ散発的な語形であるにせよ実際に定型的なパターンが形成されている以上は、その語形成に一定の文法性が働いているのは確かであろう。文法の裏づけがあるからこそ、新造形であっても既存のHLL型オノマトベと同じ特徴が現れる。
4. この場合の鑄型の範疇を(軽音節ではなく)モーラと考えても結論は同じである。しかし、日本語オノマトベの部分反復で軽音節が鑄型として機能しているとの一般化が既にあることと(Nasu 2003, 那須2004), モーラが汎言語的な鑄型の類型としては位置づけられていないこと(McCarthy and Prince 1996)を踏まえて、ここでは軽音節が鑄型として働いていると考えておく。
5. Edge-in associationについては例外もある。Riggle (2004) は12の言語での部分反復に複写と結合の端部が一致しない非局所的な振る舞いが見られることを指摘している。
6. この長母音は語末に位置するため短音化することがある。語末長母音の短音化傾向については助川・前川・上原(1999)に詳しい。
7. この原則の数少ない例外は「スッカラカン」という語形だが、同様な例が頻繁に見当たらないことから、この形に関しては散発的な例外と考えてよさそうである。
8. 一説に「リン」は「キラリ」などのリ語尾つきオノマトベに発音が加わった形の一部(キラ+リ+ン)として解釈されているが(天沼1974), ここではそうした語形成を想定せずに「リン」の形式でひとまとまりの接尾辞と捉えておく。
9. ただし、特定の象徴効果を意図して、あえて一般的な制約に従わずに破格の形が作られるケースもあるが、ここでの議論ではそうした破格の形はひとまず措く。

参考文献

- 天沼 啓. (1974) 『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版.
- Broselow, Ellen and John McCarthy. (1983-84) A theory of internal reduplication. *The Linguistic Review* 3: 25-88.
- 浜田 敦. (1949) 「促音と撥音」『人文研究』1-1・2 (浜田敦. (1986) 『国語史の諸問題』和泉書院, 38-86)
- Hamano, Shoko. (1986) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Ph.D. Dissertation, University of Florida.
- Hamano, Shoko. (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Kurosio & CSLI.
- Itô, Junko and Armin Mester. (1995) The core-periphery structure of the lexicon and constraints on reranking. *University of Massachusetts Occasional Papers (UMOP)* 18: 181-209.
- 黒田成幸. (1967) 「促音及び撥音について」『言語研究』50 : 85-99.
- McCarthy, John and Alan Prince. (1986) Prosodic morphology. ms., Brandeis University.
- McCarthy, John and Alan Prince. (1996) Prosodic morphology 1986. ms., University of Massachusetts and Rutgers University.
- McCawley, James. (1986) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. Mouton.
- Nasu, Akio. (2003) Reduplicants and prefixes in Japanese onomatopoeia. In Honma, Takeru et al. (eds.) *A New Century of Phonology and Phonological Theory*. Kaitakusha.
- 那須昭夫. (2004) 「新造オノマトベの音韻構造と分節の無標性」『日本語科学』16 : 61-91.
- Riggle, Jason. (2004) Nonlocal reduplication. ms., University of California, LA. [ROA 693-1104, <http://roa.rutgers.edu/view.php3?id=970>]
- 助川泰彦・前川喜久雄・上原聡. (1999) 「日本語長母音の短母音化現象をめぐる諸要因の実験音声学的研究と音声教育への示唆」アラム佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育』くろしお出版, 81-94.
- 田守育啓. (1991) 『日本語オノマトベの研究』神戸商科大学研究叢書 XL, 神戸商科大学.
- 田守育啓・スコウラップ=ローレンス. (1999) 『オノマトベ (日英語対照研究シリーズ6)』くろしお出版.
- Waida, Toshiko. (1984) English and Japanese onomatopoeic structures. 『女子大国文 (外国文学篇)』36 : 55-79, 大阪女子大学.
- 山口仲美. (2004) 『暮らしのことは 擬音・擬態語辞典』講談社.
- Yip, Moira. (1988) Template morphology and the direction of association. *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 551-577.